

とよぶらり

米子高専図書館情報センター報

ISSN 1344-5634

第 80 号

平成 18 年 1 月 20 日発行
米子工業高等専門学校
図書館情報センター

平成17年 (第32回) 校内読書・エッセイコンクール優秀作品発表

〈読書感想文の部〉

最優秀賞	建築学科1年	和仁佐緒里	「カシコギ」
最優秀賞	電子制御工学科5年	山本 真二	宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を読んで
佳 作	物質工学科1年	菅本友都里	読書感想文
//	建築学科2年	水島 有梨	「となり町戦争」を読んで
//	電気情報工学科1年	富山 拓朗	「老人と海」
//	物質工学科5年	中村 真弓	「よだかの星」を読んで

〈エッセイの部〉

最優秀賞	建築学科2年	山本 祥子	家 族
優 秀 賞	物質工学科1年	影山 麻夕	一つの番組から
//	建築学科2年	山本 麻実	時間の大切さを考える
佳 作	電子制御工学科1年	中原 生就	戦争と平和について
//	電子制御工学科1年	伊藤 夕佳	ずっと疑問に思っていた事

読 書 感 想 文 の 部

最優秀賞

「カシコギ」

建築学科1年 和仁 佐緒里

『こんな言葉を知っているかい？人間は、自分の子どもを世に残す以上は、死んだとしても、それはまったく死じゃないんだよー』

この本の主人公の一人であるチョンという名の父親はこう言った。この言葉の本当の意味を、私はその父親である10歳の少年タウムと、その父親のチョンから教えられた。

この「カシコギ」という物語は、白血病に苦しみながらも必死に生きぬく少年と、息子を守り、助けるために最後まで親としての志を貫いた父による、実話に基づいた韓国の小説である。

急性リンパ球性白血病、それがタウムの病気だった。最近よく耳にする、いわゆる「白血病」と言うもの。今までは医学が進歩し新しい薬の開発などで、昔のように「不治の病」と言われることもなくなった。しかしその一方で、骨髄移植をするためのドナーを待ち続けている人達が大勢いることも事実だ。タウムもその内の一人だった。2度の再発で強度の抗癌剤も、放射線治療も、もはや効果は無くなっていった。それらで一時的に悪性白血球の増加をなんとか抑えているだけだった。生きるために残された道は、骨髄移植しかない。しかしアメリカと比べ韓国も、日本と同様、骨髄提供に必要なサンプルが極めて少なかった。

骨髄バンクへの登録が足りないのは、理解と意識の問題だという。最近では前より耳にするようになった「骨髄バンク」という言葉だけれど、詳しい話を知っている人はさほど多くないんじゃないかと思う。そして何より、普段の生活の中で意識することがないような気がする。どこかで他人事だと思ってしまっているのかもしれない。そして私もその内の一人だろう。けれどこの本がきっかけで、骨髄提供者が少しでも増えたことは、本当に素晴らしいことだと思う。読者への想いが届き、その人達の背中を押すことが出来たのだから、この親子の苦しみも、少しは報われたんじゃないかと思う。

父親のチョンは、何度も金銭的な問題にぶつかった。彼は詩人だったけれど、息子のためならプライドも恥じらいも全て捨てて、必死に治療費をつくった。「生きてほしい」「治してやりたい」とそんな気持ちが痛い程伝わってきた。そしてどうしても足りなくなった時、彼はためらわず自分の体を売る決断をする。それは裏で行われている臓器売買だった。彼は腎臓を売ろうとした。創造主が人間の身体に許したただ一つの余裕、それでタウムが救えるなら、悩み躊躇する理由はないと。父は息子のためにどうしてもお金が必要だった。タウムの骨髄提供者が奇跡的に見つかったのだ。移植さえ成功すれば息子は助かる。しかしそんな彼には、末期の肝臓癌という残酷な現実が待ち受けていた。それまでも、息子の死と隣合わせの生活をし、やっと一筋の光が見えてきた時、今度は自らの死と向かい合うことになった。一体どんな気持ちだっただろうといくら考えても、とても想像出来なかった。その現実を受け入れ、彼は角膜を売った。愛する息子のために。親というものは、我が子のためにそこまで出来るものなのかと考えさせられた。チョンのような親を持った子供は、幸せだったと思う。私の親ならどうするだろう？…きっと、必死に守ってくれると思う。私は生かされているんだと、気付くことが出来た。大切なことを、忘れかけていた。

「カシコギ」という魚がいる。この魚は、雄が巣を作り、子供を育てる習性がある。産卵後、雌は子を育てることなく巣を後にし、その後孵化した稚魚がひとり立ちするまでの間、雄のパパカシコギは必死に子を守り、涙ぐましい努力の末、一年という短い生涯を終えるという。まさにこの小説の内容を示していると思う。チョンは父親として、最高に勇ましく、素晴らしかった。

「さようなら、息子よ。」

「さようなら、我が息子よ。」

「もうお前に会える日は来ないだろう。……」

「しかし、息子よ。」

「ああ、俺のすべてだった息子よ。」

「パパはこの世にいなくなっても、それはまったく死ではないのだ。」

「この世にお前を残す限り、パパはお前の中に生きている。……」

この言葉の意味が、今ならわかる気がする。結末、涙が止まらなかった。最後に、この本に出逢えたことに感謝したい。カシコギから学んだ沢山の想いを、私は決して忘れない。

最優秀賞

宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を読んで

電子制御工学科5年 山本 真二

この作品を読んで強く感じたのは、「生と死について」という事である。人間は常に「幸せ」を求め生き続けている。しかし実際のところ、何が本当の「幸せ」なのかは誰にも分からないものである。この作品を読むにあたりその答えが導き出されるわけではないのだが、宮沢賢治の中に在った「生と死について」の想いが私に「本当の幸せとは何か」を深く考えさせてくれた。

まず、この作品の舞台の中が「宇宙」ということに注目したい。ジョバンニは丘の上で寝てしまうわけだが、その夢の中でカムパネルラと共に死への旅を経験する。ここで考えるのが、「夢」「死」「宇宙」ということである。これらは未だに解明されていない不思議なものであり、誰もが追及し続けられないものである。宮沢賢治がこの無限の可能性が秘められている「宇宙」というものを舞台にし、「夢」「死への旅」とを重ねたところは、とても自然な事であるように感じた。言い換えれば「死への旅」「夢」という現実離れた世界を「宇宙」という実際に存在する世界に置き換えているのは、大変納得するところだった。宮沢賢治の独特な感性故に表現できたのだと思う。

さて、この「夢」の中でジョバンニは列車に乗りカムパネルラと遭遇するわけだが、ここでみんなの話を聞く。「みんなはね、ずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった。」という台詞があるが、このとき既にカムパネルラは死んでいたのだ。「ぬれたようにまっ黒な上着を着たせいの高い子供が、」という部分もあるが、この文章から溺死ということを感じ取ることが出来る。みんなが遅れたというのは、助けようとしたけれども助けられなかったことや、ザネリも死の世界には行かなかったこと、つまり生きて助かったことを意味している。これは物語を最後まで読み続けていると意味が分かるのだが、このような言い回しが非常に面白い。まるでみんなが列車に乗る事をを目的としていたような、まるでカムパネルラだけが自分から「死」を選んだように感じられる。たしかに人間は死への旅を送っている。この世に生を受けてから死への旅は始まっているのである。誰もが順番待ちで、列車の到着を待っているのかもしれない。「競争」という言葉で表現するのは不適切かもしれないが、物語中で使われている「走ったけれども追いつかなかった」という言い回しは、案外その通りなのかもしれないと思った。

しばらく列車が進むと、カムパネルラは母のことを想い「ぼくをゆるしてくださるだろうか」と心配に思う。母の幸せのためなら何でもする、本当に良いことをしたら母は自分のことを許してくれるだろう、と言う。ここで「幸せ」について考えるわけだが、カムパネルラが友人のザネリを助けるために死んでしまった事に注目する。

後にさそりの話が出てくるが、さそりは何の役にも立たないくらいなら、いたちの餌になってやればよかったと後悔する。家庭教師と小さい姉弟は、他人を押しつけてまで生きようとは思わず死んでいった。この物語の中には、こういった「誰かのためならば死ぬことができる」という強い想いが表現してある。この想いこそが、宮沢賢治の言う「幸せ」ではないだろうか。

そもそも幸せとは、他人が判断して決めることではない。家庭、名声、地位、お金、愛などのどれにもっとも人生の充実を感じるかで、その人の幸せが変わってくる。故に、人の幸せは決して自分の物差しでは量れない。一種の自己満足だと思う。作品中でジョバンニが鳥捕りの事をおもしろいように思い、この人の幸せのためならば河原に立って百年鳥を捕り

続けてもかまわない、といった文章を読んだとき疑問を感じた。なぜジョバンニが人の幸せを心配する必要があるのだろうか。やりがいのある仕事に就き充実した生活を送っていれば、それはその人にとっての幸せと認めてよいのではないか。するとジョバンニの回想に「ほんとうにあなたのほしいものは一体何ですか、と聞こうとして」という一文があった。ジョバンニは単にその人の仕事が好きになれず、鳥捕りをかわいそうに思ったのではない。生き物を捕まえてはせいせいしたと言ったり、人の切符を横目で見ては褒めだしたりといった、そのような滑稽な態度をとっている彼が気の毒に思えたのだ。彼が満足している今の生活に疑問を感じ、今は気付いていないかもしれないがもっと他の幸せがあるのではないかと訴えかけようとしている場面なのだと思う。確かに、他人には人の幸せをとにかく言う資格などはないが、真実が見えていない人にそれを見出すきっかけを与えることは可能なのだ。

幸せというものは、日常のあらゆる場面に存在する。ただ、それに気付くことができるかできないかで、生活の充実感も変わってくる。宮沢賢治はこの物語を通して、「相手の幸せを願う事は、自分も幸せになれる」ということが言いたかったのだと思う。そして「本当の幸せ」を見つけることは、「生きる意味」「死ぬ意味」を見出すことに繋がるのだと感じた。

佳作

読書感想文

物質工学科1年 菅本 友都里

私は、夏休みに「一リットルの涙」という本を読んだ。この本は脊髄小脳変性病という病気を患い、25歳で亡くなった女性の話である。

脊髄小脳変性病とは、人間の脳にある約140億の神経細胞のグループのうち反射的に身体のバランスをとり、素速い滑らかな運動をするのに必要な小脳・脳幹・脊髄の神経細胞が変化し、ついに消えてしまう病気である。

私は、中学2年生の時と高専に入学する年の3月

に手術をするため入院した。中2の頃、退院する3・4日前に、大部屋の同室に年が一つ上の女の子が入院してきた。小児科だったので、年の近い人は珍しく、看護師の方が紹介してくれた。それから少しずつ話すようになり、中学生で幼かったせいか、何のためらいもなくお互いの病名を聞いた。その時彼女は、膝にできものができたと言った。私はその時、そこまで重い病気とは考えていなかった。私が退院してから彼女と文通をはじめた。そして彼女の病気の話を聞くたびに重い病気だということが分かった。病名は聞かなかったが、治療の内容を聞くかぎりでは「骨肉腫」ということが分かった。骨肉腫とは、簡単に言えば骨の癌である。これは、癌が早く肺に転移しやすく、発見が遅いと死に至る。私の知り合いもこの病気で亡くなっていて、私が入院中も同じ病気で一人亡くなっていた。彼女はこの病気のため、膝上から足を切断し、手術後は薬の治療をし、1年半の長い闘病生活を終え、無事退院した。それから1年後くらいにまた手術のため約2週間入院をして、またその半年後くらいに約4ヶ月くらいの治療をした。病気のため、高校は1年くらい留年したが、今では元気に地元の高校に通っている。

このような経験もあり、この本を読んだ時、私の友人と本の中の女性とを重ねてしまっていた。病気の重さも、病名も違うけれど、すぐ泣き、単純で、でもとても強くて明るいという性格が同じだった。さらに、両方のお母さんも似ていると思った。明るく、子供以上に強く、思いやりの心を持っているということだ。

この本の中には、本人が書いた日記の一部がところどころに載せられている。その中で印象に残ったものの一つが、彼女の妹が事故で病院に運ばれたことを聞いた時に書いたもので、「大丈夫」という三文字が101個も書かれているページである。ほとんど動かない手で、一生懸命心を込めて書いたのが伝わった。妹に面会をさせてもらえなかったから、きっと彼女なりに必死で応援していたのだろうと思った。二つ目は、昔と比べて病気が進行していることが分かるくらい震えた字で「感謝の気持ちはどうふうに示せばいいのだろうか」という文である。身の周りの世話を全部やってもらっているため、その感謝の気持ちを伝えたいのだけれど、体も動かず、声も出ないため、その手段が分からない。しかし、みんなにその気持ちを伝えたいという思いが伝わって来た。

私はこの本を読み、生きているというすばらしさをさらに感じた。昔は「命は大切だ」とか「生きているだけで幸せだ」と言っていたけど、それは表面的なものだけだった。しかし今は、自分自身も病気をし、重い病気を乗り越えた友人に出会い、この本に出会ったことによって、それらの言葉を心の底から思うようになった。キレイ事でもなんでもなく、みんなにも、平凡な毎日ですばらしいと思うようになってほしい。

「となり町戦争」を読んで

建築学科2年 水島 有梨

となり町との戦争が始まる、その冒頭から物語が始まっていくこの「となり町戦争」という本を、私はこの夏読んでみました。ひどく印象的なタイトルを初めて目にした時、「何で戦争する相手がとなり町なんだろう」と疑問に思いました。その疑問を解決するために私は本を読むことに決めました。

この本のあらすじは主人公の男の住んでいる町が隣町と戦争して、主人公も戦時特別偵察業務従事者、という役を町から任命され、戦争と関わっていくというものです。戦争と言って真っ先に頭の中に思い浮かぶのは、昼夜問わず兵隊が戦って、一般人は逃げまどうという光景ですが、このとなり町戦争、ではそういう場面は一切ありません。殺人描写は描かれていない。その点では戦争に関する読み物としては異色だと思います。

また、この作品でもう一つ特徴的なのは、戦争をしている感がないという点です。普通の会社員だった主人公が戦時特別偵察業務従事者、となりますが、この戦時特別偵察業務従事者、の業務内容は車での勤務途中に隣町を通った時に隣町の様子を見るという簡単なものです。ですが、普通の戦争ならば道路が封鎖されていてもおかしくないと思います。けれども、それもされずにまして敵側の偵察者が通勤途中に様子を探るといのは戦争らしくない状況です。住人には危機感はなく、通行止めにもならず、銃も音も聞こえない。

本当に戦争をしているのか、そんな疑問を抱かずにはいられない。そんな時に町内で配られている広報紙に戦死者12名、と書かれていて、そこで

初めて戦争をしているという実感を、主人公と読者は感じます。その後、主人公は町から隣町にスパイとして住むことを頼まれ、隣町へ潜入し、スパイであるがために命が危ない状況になります。自分の身への危険と自分を守るために犠牲となった人のことを知って、主人公は「戦争」について考えます。もし、戦争が起こっても、自分が「戦争をしている」と自覚しなかったら全く別の遠くの出来事ではない。案外、今の幸せや平和というのは多くの人の不幸や犠牲の上に成り立っている。この作品内では、主人公を守るために佐々木さんという方が犠牲となった。その事実でさえ、主人公は偶然知っただけであって、もしかしたら一生、佐々木さんの犠牲を知らずに暮らし続けていたのかもしれない。

確かに今、世界の各国では戦争が行われている国も多いはずですが、日本は戦争をしていません。実際に体験した世代も少なくなってきたので、「戦争」というものを感じることは極端に少ないと思います。この作品に戦闘シーンが描かれていないのは、主人公が戦闘を経験していないから。主人公が直接銃を持って敵を殺したりはしていないが、日増しに増えていく戦死者。見えない所で確実に進んでいる。だからこそ、自分の見える範囲内だけで世界を知ろうとするのは、無理で愚かなことだとこの作品は確認させてくれました。「戦争」を始める上での大事なことは、戦争という結果を招いてしまった原因を明確にするということです。この作品では原因が具体的に書かれてありません。作者の意図的に重要性が低いと思われたのかもしれませんが、原因が薄くても戦争は起こってしまうものなのかなと胸が痛くなりました。無知な私達はもっと知るべきです。「戦争のこと」、「世界情勢のこと」、「飢餓で苦しんでいる人々のこと」、そして、知った上で自分にできることは何なのか真剣に考えるべきだと思います。

「老人と海」

電気情報工学科1年 富山 拓朗

僕は海が好きだ。泳ぐことも好きだけど、ずっとながめていることも好きだ。というより、家の近くが海だから、幼い頃から海を見ている。静かな海、いつ見ても穏やか海だった。その海がそんなに怖い

ものだとも思いませんでした。

キューバの老漁夫サンチャゴは、長い不漁にもめげず、小舟に乗り、たった一人で出漁する。残りわずかな餌に想像を絶する巨大なカジキマグロがかかった。4日にわたる死闘ののち老人は勝ったが、帰途鮫に襲われ、舟にくくりつけた獲物をみるみる食いちぎられてゆく。

徹底した外面描写を用い、大漁を相手に雄々しく戦う老人の姿を通して、自然の厳しさと人間の勇気を表している。この本を通して、自然の恐さ、人間の優しさをよく理解した。

青空を映し出す広大な海原。キューバの小さな漁村に、ある老漁夫がいた。だが、既に84日間もの不漁が続いている。初めは老人を敬う少年も共に漁に出ていたが、40日目には両親に別の船に乗り込むように命じられる。それでも少年は老人の漁が終わるのを浜辺で待ち、明日の餌の用意や老人の晩御飯の世話をいつもしている。そして、今日もまた薄暗い早朝に老人は小さな舟を海に出し、孤独な戦いに出る。

僕にもお爺さんがいるが、こんなに元気ではない。しかし、85日も漁に出ている老人はそういるだろうか。本当に老人なのかと疑ってしまう。そして、すぐむきになってしまう子供のような性格は、僕のお爺さんともよく似ている。そんな性格だから、少年と気が合うのかもしれない。

少年はとても優しい人間だと思う。赤の他人の老人の世話を毎日毎日しているなんて、僕にはそこまでできない。しかし、この二人の過去にどんなことがあったのかは知らないが、強い絆で結ばれていることはよくわかった。

85日目、老人は一匹のカジキマグロと出くわした。「さあ来い」と、彼は戦いを挑んだ。それはとても人間と魚の戦いには思えなかった。カジキマグロを暴れながらも網で引っ掛け、4日間を共に過ごした。老人はカジキや、飛び疲れ、舟で休んでいた小鳥に、話しかけたりしていた。仲間がほしかったのだろう。周り一面真っ青な海の上で一人ぼっちなのだから。そして逆境に立たされた時、老人は自分と対話し、自分を落ちつかせ、自信をもたせる。とてもつらかったのだと思う。そして3日目、老人はカジキマグロとの決着をつけた。

多分老人はカジキマグロを殺した後、とても悔いを残したと思う。老人は、やつが生きていたとき、死んでからだって、兄弟のように愛していたのだから

ら。もし自分が魚だったらと思うと嫌になってくる。しかし、この世は弱肉強食の世界だ。仕方がないことなのだろうか。もっと深く考える必要があると思う。

そして老人は少年が待つ村へ戻ろうとしていた。そのとき、彼は最悪の事態が近づきつつあることを知っていた。二匹の鮫が近づいていることに気づいていたのだ。老人はすかさず、ナイフをとりつけたオールを手にして立ち上がった。二匹とも殺したものの、一匹と戦っている間に、もう一匹が老人のカジキマグロを4分の1も食いつくしてしまった。彼は急に黙りこんでしまった。もう魚の方を見る気にはなれない。老人は魚に話しかけた。「お前にとっても、俺にとっても、意味はなかった。本当にすまんあ。」と彼は心のうちで言った。敵はまだまだ押し寄せてきた。また二匹の鮫がやって来たのだ。彼は頑張った。鮫は何とか殺せたが、彼の魚にはもう食うところは少しも残っていなかったのだ。

そして老人は4日目の朝、無事村に戻ることができた。倒れながらも自分の小屋にたどり着き、彼は眠りに落ちた。翌朝、少年が小屋に来ると、老人の体の怪我を見て涙した。とにかく生きていただけでも奇跡だ。少年も本当に安心していただけだと思う。

この本を読んで本当の海の怖さを知った。大切な物を失う気持ち、そして命の大切さを学んだ。しかしそれだけではない。この「老人と海」は、表面的にはただ一人の漁師が、カジキを釣り、そして鮫に食べられてしまったというストーリーだが、そこにはもっと深い意味が込められていると感じた。そこは人間が命をかけて戦った結果、何物も残らないという虚無感が漂う。けれど自分が全力をかけて戦ったという事実は、そこに何物にも変えられない勝利の充実感を残すということだ。自分の全身全霊をかけて堂々と勝負するそんなサンチャゴの姿は、一人の人間としてとても美しかった。

人間の力強さ、美しさ、自然の厳しさ、この本を読んでたくさんのことを学べた。

「よだかの星」を読んで

物質工学科5年 中村 真弓

本当の幸福とはどのようなもので、どの様に手に入れる事ができるのでしょうか。この作品はこの難解な問題に対する宮沢賢治の考えや、高い精神を見る

事のできる作品です。

みにくい鳥のよだかは、死んだ方がましと思うほど他の鳥達からいじめられ、遠い彼方の空のずっと向こうへ幸福を求め飛んで行きます。しかし鳥ばかりか太陽や星にも嫌われてしまい、よだかはキシキシと悲しく鳴きます。生きる事は幸せな事である一方、辛い事でもあります。私達人間の世界でも、弱者はしいたげられ、強者は権力をふるいます。人間は権力者になるために競い合い、他人を蹴落とし名声や地位という名の存在価値を手に入れます。では、弱者の存在価値はどの様に見つければよいのでしょうか。どの様にすれば幸福になれるのでしょうか。私自身も自分に存在価値があるのか、生きていて何に役立つのか考えた事がありますが、今だに答えは見つかっていません。そんなある日、私は米子市内でキリスト教徒らしい人に呼び止められた事がありました。本当に失礼な話ですが、私は不信感をあらわにしながら彼女達の話をも3分間聞く事になりました。まず彼女達は私に一つの質問をなげかけました。

「貴方は本当の幸福とはどのようなもので、どうすれば幸せになれるか、どうすれば安らぎを得られるか考えた事はありませんか。」

私は答えに困りながら言いました。

「はい、あります。」

彼女達は続けました。

「答えは見つかりましたか。」

「いいえ、分かりません。」

私は何一つ十分に答える事はできませんでした。彼女達はうなずき、おだやかな顔でほほえみました。そんな彼女達の透き通った瞳を見ていると、どうしようもなく悲しくなさない気持ちになり下を向いていました。

「神様だけが知っています。」

それが彼女達の答えでした。私の求めていた答えは遠く、ある意味では近い答えでした。本当の幸福とはそう簡単に見つかるものではありません。しかし人々は昔から宗教の中にその答えを見つけ、宗教によって導かれてきました。私を呼び止めた彼女達もそうであり、宮沢賢治も熱心な法華経の信者でした。

「まずもろともに、かがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばろう」は、賢治の究極的に描く宗教的精神であり、法華経の精神です。微塵となって無方の空に散らばる事によって転性し、すべての苦しみから開放されるのです。賢治のこのような思想は、彼の作品の上にさまざまな影を落とし主題の支えと

なって具象化されています。

この作品の中でよだかは自分が多くの虫を殺し食べる事を悲しみ嘆きます。この悲しみは菜食主義者の宮沢賢治の悲しみであり、生きる事の辛さを感じさせます。生きると言う事は他の生き物の死の上で成り立っており、よだかにとって、みにくい自分が他の生物の死の上で成り立っている事は耐えがたい悲しみだったようです。

よだかは彼にとって悲しい地上から、まっしぐらに理想の世界を求めて、どこまでもどこまでも空へのぼって行きます。よだかはぼろぼろになりながら、とうとう青い光になってしずかに燃え、星になります。心優しいよだかは、自分の力で転生したのです。現実の死が、異なる次元の世界において生きるのです。「転生」が賢治の最後にたどりついた答えだったのでしょうか。「よだかの星」以外にも、「グスコブドリの伝記」では、ブドリが献身的に生き、最終的には英雄的とも思われる死によって「無方の空」に散らばって「転生」し、「銀河鉄道の夜」のジョバンニ、「ポラーノの広場」におけるファゼーロも不遇と苦難に生い立つと言う点では同質です。この作品を読んでいて思い出したのは祖母の言葉でした。「人には優しく、素直に生きなさい。そうすれば天国に行けるよ。」

賢治の言いたかった事もそういう事ではないでしょうか。私自身は祖母の言う人間にはほど遠い人間になってしまいましたが、今でもその様な綺麗な人、綺麗なものには強い憧れがあります。賢治のこの作品も、賢治の言葉を借りるならば、私にとって「綺麗なもの」であり「綺麗な食べ物」でした。賢治が多くの人々へ与えた食べ物は、人々の心の乾きを潤し、人々の心を満たします。そして私自身も、満たされた物があふれる様に目から涙がこぼれました。

賢治は生涯を通して農村の人々に献身的に尽くし、東北の農村に貢献してきました。その様な美しい心を持った賢治は、法華教の教え通り転生し、よだかの星と同じ様に、どこかの星の上で青白く美しく熱え続けていると私は信じています。

エッセイの部



家 族

建築学科2年 山本 祥子

家族について。家族はとても大切だとか、助け合っていないといけないだとか一般的によく言われる。私は中学校の頃まで、家族の大切さや助け合いの重要性などをあまり考えることはなかった。けれど、この頃はそれを少しずつ考えるようになってきた。それは、高専に入学し、寮に入り、家族と離れているからだと思う。

私の家族は、父、母、妹、弟、そして私の5人だ。何かと口うるさい父と母、生意気な妹、無鉄砲な弟。正直、一緒にいていい気はしなかった。そんな家族とも寮に入れば別れられると思うと清々した。

そして、寮に入り、家族と離れたが、寂しいと感じることはなかった。逆に、何か一人立ちできたような気がして気分が揚々とした。学校に行ったり、部活をしたり、寮で過ごして…などしているうちに、家族というものがどんなものだったのかを忘れてきてしまっていた。「どんなものだったのかを忘れてきてしまっていた」といっても、はじめから、私の中に「家族とは○○だ!」という定義やイメージがあった訳ではない。忘れてきていたものは、何か感覚的なものだったのだ。

そして、ゴールデン・ウィークがやってきて、はじめて帰省することになった。バスの中で、私はあまり家に帰りたくないと思った。学校や寮で過ごす方が絶対いいにきまっている…

そして、家についた。家に帰ると何か変な気分だった。以前と全然変わっていないのに、以前感じる事のなかった「落ちつく」ようなものを感じた。1カ月振りに会った父も母も妹も弟もすべてが懐かしく思えた。母が、私に、

「おかえり。」

と言った。何か照れくさかった。けれど、うれしくて、自然と微笑がこぼれ、

「ただいま。」

と言った。そして、家の中に入るとリビングで、父

と妹と弟がテレビを見ていたが、私が帰ってきたのに気づき、母と同様に、

「おかえり。」

と言ってくれた。

その夜、久しぶりに、私は家族と食事をした。母は私の好きなグラタンを作ってくれていた。そして、そのグラタンを食べながら、父が、

「学校はどんなん？」

と聞いてきた。

「学校は、楽しいよ。」

と私は答えた。以前なら、そんな質問も「別に」など適当にかわしていたが、その時ばかりは、家族とのそんな何気ない会話も大切に思えた。

ゴールデン・ウィークの間は、時間があっという間に過ぎていった。生意気な妹とのたわいないおしゃべり、無鉄砲な弟と遊ぶこと、そのすべてが楽しかった。帰る日の前日に、母が、

「いつでも帰っておいで。」

と言った。その言葉は今でも思い出される。

寮に戻り気付いたこと。それは確実に私の中の家族観が変わっていたことだ。今まで決して感じたことのなかったあたたかみを感じた。このあたたかみは、ずっと私の側にあったのだと思う。しかし、今まで気付けずにいた。そして、今、家族と離れてみて、はじめてあたたかみに気付いた。それまで忘れていたのはこのあたたかみだったのだ。

家族にはとても感謝しなければいけないと思う。父が居て、働いていてくれるおかげで学校に通えて、自分の好きなことができている。母が居て、料理や洗濯、そうじをしてくれているから、日常生活が成り立っている。妹や弟が居て、家にいる時も、一人ではなく、とても楽しく過ごすことができる。かけがえのない存在だ。

家族に対する価値観というものは、人それぞれだと思う。すごく大切に思う人もいれば、家族に必要性を感じない人もいる。最近、自分の子供を虐待したり、家族を殺害したりして、家族というものの大切さを見失ってきているように感じる。これは、家族にお互いを思いやる心が薄れてきているからだと思う。そして、現在、家族というものの存在性をあらためて考えていくことが重要だと思う。

優秀賞

一つの番組から

物質工学科1年 影山 麻夕

今年を終戦60年の年でした。今、戦時中の様子を考えようと思っても、私の生活の周りには影も形もないので想像が付きません。

小学生の時、修学旅行で広島市の平和記念公園に行き、資料館でいろいろ見たけれど、その時はまだ広島に原爆が落とされたという実感が湧きませんでした。しかし、「すごく恐ろしい」と感じたのは確かです。

それから4年後の今、私は夏休み中に広島市の原爆についてのテレビを見ました。

その番組では、被爆者の話から当時の様子をCGで再現していました。人々はいつものように家を出て行きます。その後、一瞬のうちに大きな被害の出る原爆が落とされようとは誰も思っていません。たくさんの人々が、家族や友達と離れ離れになったり、失ったりしました。その人たちのことを考えると本当に涙が出てきそうになりました。亡くなっていった人々はどう思いながら息をひきとっていったんだろう、一瞬のことで何もわからない状態だったのかという考えが頭の中をめぐりました。ここまで被爆者の気持ちを考えたのは初めてかもしれません。CGの映像を見て、これまでにない大きな衝撃を受けました。

そして、番組の後半、実際に原爆を落としたAさんが出てきました。そこで被爆者と対談しました。被爆者は、必死に当時から今までの苦しみを伝えました。しかし、その話を聞いたAさんの反応は

「私は謝罪をしない。」

と言うものでした。私はそれを聞き、「こんなにもひどいことをしたのにどうしたこと」と思いました。しかし、その後こう続けました。

「こんな言葉があります。『私たちは真珠湾を忘れない。』」

そこで、ハッとしました。私たちの日本だけがつらく、苦しく、悲しい思いをしたのではないということに気付かされたのです。もともと日本が真珠湾に攻撃したこと、太平洋戦争が始まりました。アメリカだって日本と同じように、たくさんの人々が犠牲となっていたのです。確かに原爆という恐ろしい

核兵器たった一つで、考えられないほどの犠牲者が出たけれど、違う方法で日本もアメリカでたくさん犠牲者を出したことも間違いありません。そう考えると私は、もうどっちの国が良いとか悪いとか言っている場合ではないと思いました。この原爆の話で、本当に戦争の残酷さ、恐ろしさを思い知らされたように思います。

戦争は一人一人の人間が加害者にも被害者にもなるものだと思います。加害者になるのも被害者になるのもすごくつらく、悲しいことだと思います。だから、戦争中の人々が精神的にも追いつめられていったということを考えると、本当につらく思います。そして戦争は戦時中の苦しみだけでなく、戦後も苦しみを残していきます。広島原爆だって、今だに放射能を浴びて苦しんでいる人がいます。原爆に限らず、空襲などでも大切な人を失い、心の傷が消えない人だっています。戦争の体験者は一人一人なんらかの苦しみを持っていると思います。

こんな戦争を何度もくり返さず、やっぱり平和を願います。世界中を平和にするために、苦しみや悲しみを語り継いでいくことが一番の方法だと思います。日本は広島と長崎、二つも原爆の被害に遭っています。核兵器の恐ろしさを一番に伝えられるのは日本だと思います。だから、どんなことがあったのか知る必要があるし、それを絶対に忘れてはなりません。

今まであたりまえのように「戦争はしてはいけない。」と思っていました。しかし、一つの番組を見たことがきっかけで、深く考え、本当に心からそう思うようになりました。また、「戦争をしたくない。」とも思います。戦争は人がお互いを傷つけあうものに過ぎません。そして、核兵器が世の中から消え去ることを願います。

優秀賞

時間の大切さを考える

建築学科2年 山本 麻実

砂時計の砂の流れをじっと見つめる……。細かい砂が一時も休むことなく流れている。この〈砂の流れ〉が〈時の流れ〉なのだと思うと、この、今生きている〈一瞬〉がとても貴重なものに思えた。

この度、私は島根県の仁摩町にある「仁摩サンドミュージアム」に行く機会があった。ここには「砂暦（すなごよみ）」と呼ばれる、世界最大の一年計

砂時計がある。高さ5.2メートル、直径1メートル、砂の量1トンという、巨大な砂時計だった。実物の砂時計は頭上の高い所に設置されており、砂の流れの様子を直接見ることはできなかったが、ノズルの部分が拡大された映像が流れており、その砂の流れを眺めることができた。それをじっと見つめた時、私は〈時間〉というものの大切さを感じたのだ。

思えば、昔の歌人が残した文章からも、〈時の流れ〉について学ぶことがある。例えば、鴨長明の『方丈記』では、「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」という文章がある。これは「いつも滔々と流れ行く川の流れは絶えずなくて、それでいてそこにある水は、もとの水ではない」という意味である。私は〈時の流れ〉も、これとおなじようなものではないかと思った。時間はいつも絶えず流れるが、同じ時間は二度と流れない。やはり〈時間〉とは、とても貴重なものだと思う。

それにしても〈時間〉とは、どのようにして始まったのだろうか？……そんな事を考えていると、私は兵庫県にある「明石市天文科学館」に行ったことを思い出した。そこは、東経135度子午線が通過する、日本標準時の基準となる場所である。そして、そこでは〈時〉に関するさまざまな展示がしてあった。そこで、昔の「振り子時計」や「ぜんまい式時計」の展示を見ていた時に、私はふと、「時間はどのようにしてできたのか」という素朴な疑問が浮かんだ。

もともと〈時間〉というものは存在しなかった。人類が誕生し、生きていく中で、繰り返す環境や明暗、あるいは生理的・物理的なコンディションなどにより、朝・昼・夜や寒さ・暑さの繰り返しの周期を感じていきながら、一日・一年をひとつの区切りとして肌で感じていった。〈時間〉という、そのものは、自然界には存在しない。一日の刻々と変化する環境の中で、学習を重ね、やがて人間は〈時〉という流れを掴むようになったのだ。

古代の人々が時の流れを知る手段は、天体観測であった。太陽や星を観測することで、古代の人々は、一日の流れや、季節の変化を捉えようとした。最初は、「日の出」や「日の入り」から、一日という時を生活の目安としていた人々は、同じ一日でも太陽の動きに合わせて、影の形や位置が変わることに気づいた。こうして、最初の時計である「日時計」が誕生した。その後、「水時計」の水の流れが新しい時を刻み、「火時計」や「砂時計」がジリジリと時を刻んだ。そして、「機械式時計」の歯車が時のリズムを刻んでいった。また、時計の小型化により、腕時計が生まれた。その他にも、原子時計、電波時計や、からくり時計などが発明された。

〈時間〉というものは、古代から受け継がれながら、その時代に合った形に变革されていった。そして、ゆっくりと正確なものになっていった。「時は金なり」ということわざがあり、昔の人も時間の大切さというものは考えていた。昔も今も、同じように流れる〈時間〉であるが、今、私達は科学の進歩により、正確に刻まれる時の中で生きている。私達にとって〈時間〉とはとても身近なものとなっているのだから、そんな時間を有効に使っていきたいと思う。

では、どのように時間を使えば、時間を有効に使ったことになるのであろうか。毎日をただただ過ごすのは、時間を無駄にしているように思うが、たまにはボーっと過ごす時間も必要だと思う。また、仕事や勉強や趣味などに没頭する充実した時間は、やはり大切だと思う。どのようにして時間を使うのが一番良いのかというのは、人それぞれの考え方によって違うと思うので、はっきりとは言えない。私の場合は、ボーっとして時間を過ごしてしまった時には、後になって「時間が勿体なかったなあ……。」と後悔することが多い。ボーっとしたり、寝たりして過ごす時間も好きだけれど、やはり充実した時間を過ごせることが一番だと私は思う。

これからの人生で、どんな時間を過ごすのかというのは、心掛け次第だと思う。私は、この文章を書くにあたり、改めて〈時間の大切さ〉というものを強く感じた。だから、これから悔いのない充実した毎日が送れるよう、「もう二度と戻らないこの〈一瞬〉の大切さ」を意識し、日々精進していきたいと思う。

佳作

戦争と平和について

電子制御工学科1年 中原 生就

僕は戦争を経験したことがない。しかし、近年、日本では憲法9条の改正が叫ばれ、国民保護法という非常事態に対する新しい法律の準備が進んだり、戦争に向かっているとしか思えない。このままでは僕は戦争を経験することになるかもしれない。

日本は60年ほど前、太平洋戦争という国をあげての戦争で負け、多くの死者を出した。当時の日本は、世界恐慌などの影響で経済が苦しくなり、アジアの国々と戦争をし領土を増やしていった。教育も天皇が国が一番大切だと教えられ、人を殺すことが肯定された。戦争をする前は「命」が一番大切だと教えられていたのが、戦争が始まると「天皇」や「国」

が一番大切だと教えられてしまうのだ。これは大変なことなのではないだろうか。命の大切さを教える教育の場で人殺しが肯定される。こんなに理不尽なことがあっても良いのだろうか。「人の命より大切なものは何一つない」と教えられてきた僕は幸せだ。僕は人なんて殺したくもないし、殺されたくもない。これが普通なのではないだろうか。しかし、今でも世界のどこかで国が一番大切だと教えられている子供たちがいる。アフリカには「子供兵」なるものまである。僕は悲しい。戦争が起これば教育がねじ曲げられ、子供たちの心がねじ曲げられる。戦争は人の心にも被害を与えると僕は思う。

すこし前の話になるが、香田証生さんがイラクで拘束され殺害された。インターネットで殺害の様子を映した動画が公開されるという悲惨なものだった。このことがニュースで報道されると、危険な場所へ行くのが悪いという意見が飛び交った。しかし、よく考えてみてほしい。香田さんが何を思ってイラクへ行き、どういう思いで殺害されていったのかを。イラクで今、何が起こっていて、自分に何ができるのかを見て来たかったのではないだろうか。殺害される時の思いといたら言葉にならないだろう。平和活動をしようとしている者が殺害される。これは、あってはならないことだ。こんなことでは、世界は永遠に平和になんてならない。まずは、人が一人殺されたことに激怒するべきである。それから、平和活動の仕方を議論しても遅くはない。

最近の戦争やテロは宗教的理由によるものが多いように思える。宗教は人々がけんかをせず団結するために作られたと、僕は思う。その宗教が今は戦争の種になっている。たしかに、それぞれの宗教に違いはあるし、僕がとやかく言えることでもない。しかし、もう一度それぞれの宗教で正しい教えを学び、他の宗教もよく知ることが大切なことではないだろうか。そして、互いに認め合い、互いの宗教を尊重することが大切である。戦争を起こせるだけのパワーが宗教にはある。そのパワーを逆の方向に向けてみるのはどうだろうか。きっと、すばらしい世界になると僕は思う。

大昔にも戦争はあった。しかし、その戦争は自分たちが生きるために、仕方なくやったことだ。相手を思いやる余裕なんてなかった。しかし、今は違う。戦争を起こす国、特にアメリカなどは経済的にも安定し、戦争は自国のために必ずしも必要ではない。つまり、相手を思いやる余裕があるのだ。そういう余裕のある先進国などが、まだ余裕のない国に援助をし、世界を平和にしていく中心になるべきだと思う。日本も先進国の一つだから、日本国民は平和について真剣に考える必要があると思う。

僕たちは他の動物とは少し変わった人間という生き物だ。他の生き物と違って「欲」を抑えることができるという特別な能力がある。それを使わずに、生きていくと、必ず戦争はおこる。それでは、ただの野生の動物になってしまう。そんなのは嫌だし、悔しい。人間はもっと高等な生き物だ。人間なら、相手の気持ちも考えることができるので、戦争をしなくてもすむと思う。他の生き物を、技術だけでなく、戦いをやめるというところで出し抜いてほしい。人間は最高の生き物だから。

ずっと疑問に思っていた事

電子制御工学科1年 伊藤 夕佳

「結果よりも一生懸命やったかどうかの方が大切なんだよ。」

幾度となく同じ台詞を聞いた。

「次、頑張ればいいんだって。」

何度も何度もそう言われてきた。

そうやって私は一生懸命頑張る事だけに目を向けてきた。結果なんて、見て見ぬふりをしてきた。でも本当に、結果はどうでも良い事なんだろうか。

小さい頃からずっと疑問に思っていた。「よく頑張ったね。」そんな大人の言葉に、「いや、今の結果的に良くなかったじゃん。」なんて心の中でつっこみを入れてみたり。やっぱり私は、結果は大切だと思う。「一生懸命やればいいや。」なんて思っていたら、本当に一生懸命になれない気がするから。

私自身、そうやって結果を求めなかった。いつも、私なりに頑張ったと思いつ込んでいた。でもそうじゃないと教えてくれたのは、部活のソフトテニス部と顧問の先生だった。

中学生活も2年目に入り、去年と変わりもなくダラダラと過ごす予定。もともとスポーツが苦手だった私は、部活だって全然やる気なかった。私達の中学校は運動部しかない。女子は、卓球、バレー、ソフトテニスの3つ。3年間変える事もできず、絶対に入らないといけない部活なんて、スポーツ嫌いの私にとっては地獄のようなものだ。やりたくもないのにやらされる部活で、頑張れるはずがない。そんなダラけた部を見ていられなくなったんだと思う。新しく顧問になった先生は、部の再生を図るべく立ち上がった。すごいスパルタで毎日のように怒られ、頭を叩かれる。ひどい時にはラケットで殴られる事もあった。人一倍運動神経の鈍い私は、やっぱり人よりも多く怒られる。もう部活なんて、テニスなんて、大嫌いだ。そう思っていた。

そして、また試合に負けた。また怒られる。「やる気あるんか!!」やる気なんてない。「お前、テニスやめろ!!」好きでテニス部に入ったんじゃない。できるなら私だってやめたい。こんなふうに怒られるのはいつもの事。いつも同じように怒られる。でも、この時だけは、少し悔しかった。ちょっと悲しかった。でも私なりに頑張っただけなんだ。

それからは、この日の事がやけに気になってずっと考えていた。私は逃げているんじゃないかなあ。結果から。結果を受け入れたくなくて、逃げを正当化しているだけなんだ。

そう思って、今度はちょっと頑張ってみる事にした。そして、初めて勝った。今までに経験した事のない嬉しさだった。相手は泣いていた。先生に怒られていた。でも試合をしていた時、勝ちたいっていう一生懸命さが、すごく伝わってきた。あんなに一生懸命だったのに、すごく悔しそうな顔をする。いや、一生懸命やる事が目標じゃない。試合に勝つという結果を目指していたんだ。結果を目標として頑張れば、自然と一生懸命になれるんだ。

私は今まで、「私なり」にだとか「一生懸命やれば」だとか言って、結果を求めなかった。テニスはやらなきゃいけないからしてるだけ。卒業したら絶対やるもんかって思っていた。でも、結果を求めてやるテニスは、すごく楽しかった。たとえ、その結果が悪いものだとしても楽しかった。今まで楽しくなかったのはきっと、一生懸命やる事を目標としていたからだ。一生懸命なんて、何か一つに向かって頑張れば、何かを求めてやれば簡単にできてしまう。どんなに私が、運動神経が鈍くたって、テニスが下手だからって頑張れば勝てるかもしれない。本当に勝ちたいと思って練習したら、できなかった事もできるようになるかもしれない。それは、勝つという目標、結果を求めているから。だから本当に一生懸命になれる。一生懸命やろうと思っても、本当に一生懸命になれない。一生懸命は、意識してする事じゃないんだ。

私は、部活を通して結果の大切さを知った。何事にも結果はある。私達は、良い結果を求めて頑張るんだ。結果なんてどうでも良いなんて言ったら、本当に頑張る事はできない。悪い結果ばかりが残って、何もかもが嫌になる。ちょっと良い結果を求めて手を伸ばすだけで、大嫌いだったものを好きになれるかもしれない。結果は終わりであって、終わりではない。大きな可能性を秘めて、私達がそれに気付くのに待っているんだ。

講評

本年度も校内読書・エッセイコンクールが開催されました。右のように、多くの応募作品がありましたことを御報告いたします。審査についても厳正に行われ、読書感想文の部6作品、エッセイの部5作品が入選しました。

さて、本年7月に「文字・活字文化振興法」が公布されました。この法律は、主に「公立図書館の充実」「学校教育における言語力の涵養」「学術出版物の普及」をその目的にしています。また、その第十二条として、「国及び地方公共団体は、文字・活字文化の振興に関する施策を実施するため必要な財政上の措置その他の措置を講ずるよう努めるものとする。」とあります。これは本コンクールの実施の重要な根拠となるものです。学生たちの「想い」や「言葉」を真面目に考える、そういう時代が到来したということだと思います。

平成17年度 校内読書・エッセイコンクール応募数

	読書感想文の部	エッセイの部
1年	78	101
2年	25	8
3年	1	1
4年	0	1
5年	50	0
計	154	111

図書館の思い出

図書委員会の思い出

電子制御工学科5年 廣田 麻衣

「図書委員会」と聞いて、楽しそうなイメージを抱く人は少ないのではないかと思います。私は高専2年生から5年生までの4年間、図書委員会に在籍しました。その中で体験した仕事は、予想に反して楽しいものでした。また、4年生の時に委員長をさせてもらったことで得たものも大きいと感じます。

特に4年間を通じて携わった、図書館報「とし

よぶらり」の特集が印象に強く残っています。冬休みに長編の小説を読んで感想を書いたり、好きな本を一冊に絞れなくて悩んだり。人に読ませる文章をまとめることの難しさを知りました。

他にも、毎年一回のブックハンティング、高専祭企画。米子高専の図書委員会は、なかなか楽しい委員会でした。

最後に、仕事を教えていただいた先輩方、一緒に仕事をしてくれた後輩のみなさん、顧問の先生方、そして、いつも図書館でお世話になっている司書の方々に感謝いたします。ありがとうございました。

新任教員

読書ノート

電気情報工学科 小川 覚美

本を読み終わって、その本のタイトル、著者、読み始めた日、読み終わった日、読み終わった直後の率直な感想を読書ノートに書き留めておく。感想は数ページに及ぶこともあるし、数行で終わることもある。これは、私が小学校5年生の夏に始めて現在まで続けている習慣である。きっかけは、当時の小学校の担任の先生の、読んだ本を読書ノートに記録してみようという一言からだった。

中学時代は部活動に忙しく本を読むことも少なくなっていたが、高校に入り、本を読むことに熱心だった国語の先生との出会いから、再び本を読み、読書ノートに記録するようになった。高校2年の夏休み前に出会った本から受けた強烈な印象を忘れることができない。そのことが、私に本を読むことに興味を向けさせ、その夏休みに100冊以上の本を読むきっかけとなった。その本はマーガレット・ミッチェル著、大久保康雄・竹内道之助訳の『風と共に去りぬ』である。文庫本5冊、原作は1000ページほどの作品であるが、寝る時間も

忘れて一気に読んでしまった記憶がある。それは、南北戦争、南部軍の敗戦、戦後の再建という時代のアメリカ南部を舞台として、大農園で生まれ育ったスカーレット・オハラという女性を中心に、大きく社会が変化する時代を生きていく人々の姿が描かれた歴史小説である。様々な時代背景はあるが、過酷な時代を生き抜くために、古いしきたりや秩序にとらわれず、決して諦めず、様々な困難や苦悩に立ち向かうスカーレットの姿が、実在しない人物ではあるが、出版されてから70年程経った今でも、多くの人々を惹きつけるのであろう。私もその一人であった。高校生だった私は衝撃を受け、スカーレットが困難に立ち向かうとき呟く"Tomorrow is another day."という有名な台詞はずっと心から離れなかった。

同じ頃読んだ新田次郎著の『アラスカ物語』も深く印象に残っている本の一つである。20世紀の初頭にアラスカのエスキモー（イヌイトと呼ばれるが）社会を窮地から救い、ジャパニーズ・モーゼと呼ばれた実在した日本人、フランク安田（安田恭輔）という人物の生涯が描かれている。アラスカの地で献身的に活動し続け、偉業を成し遂げながらも、日本への深い望郷の念を抱き続け、しかし、91歳で亡くなるまで生涯日本へは帰ること

はなかったフランク安田という人物の人生に、高校生の私はスケールの大きさと憧れや希望、と同時に儂^{はかな}さも感じ、また、フランク安田が辿ったアラスカの大地への憧れも抱いた。

本は、空間や時間を越えて我々が普段体験できない世界に出会い、そこからいろんなことを考える機会を与えてくれるものだと思っている。本から受ける印象は、人それぞれ、それぞれの立場や年齢と共に変わっていく。上記の2冊を含めて高校時代に読んだ本は、その後、大学生、大学院生、就職してから読んだ本よりも、強く印象に残っているものが多い。読書ノートを読み返してみると、恥ずかしくもなるが、その頃どんなことを考えていたかが読み取れる。

これからも、本を読んで読書ノートに記録することは続けていこう。区切りのいいところで読書ノートの本が1000冊目になったら、小学生時代の恩師に報告しようかと思っている。いつのことになるだろう。

もし、この読書ノートなるものに興味を持ったら作ってみたいかがですか。本を読んでその時しか感じられない感想を書き留めておく。ただ、それだけのことですが。

古本市を開催して

電気工学科3年 高橋 裕也

僕たち図書委員会は、高専祭で初めて古本市を開きました。最初、図書委員だけで集めようと思いましたが限界に気づき、委員内で話し合った末、学生や先生方に古本を寄附してもらうことにしました。結局、宣伝の仕方が悪かったのか学生からはあまり集まりませんでした。先生方から多大なる協力を頂いたお陰で、300冊以上の古本を集めることができました。

高専祭前日。

図書館一階のロビーにある鳥取県の模型や椅子をみんなで力を合わせ片付けて、スペースを確保しました。次に、長机を店らしく見えるようにセ

ティングをします。本当はコンビニの本棚を真似て並べたかったのですが、雑誌サイズの古本が少なかったために実現しませんでした。なので、机を壁に沿わずようにして並べました。机を輪の形にして並べると、お客さんが本を見やすいと思ったからです。

昼前に買い出しに出ました。作業で使うポスカ、マッキー、ノートに付箋、最後に金庫を買い揃えました。

高専に帰ってからは古本の値段づけの作業です。付箋を色別に10円から300円まで値段を定めて、古本に張って仕分けていきます。余り基準もなくフィーリングで曖昧に値段を決めていきました。でも、その曖昧な中に、選んだ人の趣味が垣間見えたりして愉しかったです。そんな感じで一日は過ぎていきました。

高専祭当日。

ポスターを張り、前日帰り間際に作った看板を掲げて、古本市を開店しました。机に並べた古本をお客さんが眺めていかれる時は、内心ドキドキでした。

「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」の挨拶は欠かさず、少しでもお客さんの居心地が良くなるように、クラシックのCDを流したり、段ボールの切れ端を再利用して作った「宣伝マン」なる者を歩かせて、アピールしたりしました。

客足が少ない中で、お客さんが古本を買っていかれた時が一番嬉しかったです。

高専祭最終日。

朝から天気が悪くて、高専祭に来る人が目に見えて少ない日でした。僕は基本的にクラスの店を手伝っていたのでよく分かりませんでした。予想通り売れ行きはさっぱりだったらしいです。やはり「今から10円均一！」みたいなことをやれば良かったかな、と今になって反省しています。

本当に初めてだらけの企画でした。どうやって古本を集めるのか、どんなふうにとったら人が来やすいのかななどを、みんなで試行錯誤するのも大変でしたが、色々勉強になりました。

結果的に古本がたくさん残りましたが、図書館に新加入できる本代がいくらか集まりました。近

いうちに図書館に並ぶ予定ですので、楽しみにしておいて下さい。

最後に、古本を提供して下さった先生方、サポートして下さった学生会の皆さん、それから古本市を成功に導いてくれた皆さんに、この場を借りて御礼を言います。ありがとうございました。

そして、来年も図書委員会をよろしく願います。

古本市での売り上げで、学生図書委員会では次の図書を購入しました。すべて米子高専図書館に寄贈しています。ぜひご覧ください。

『僕は天使の羽根を踏まない』『玉響荘のユーウツ』『インストール』『野ブタをプロデュース』『電子の星』『13階段』『妖怪大事典』『さおだけ屋はなぜ潰れないのか』『キノの旅IX』『頭がいい人の「自分を高く売る」』



文化祭での学生図書委員会による古本市

平成17年度

米子高専文化セミナー報告(第2回～第4回)

平成17年度の米子高専文化セミナーは、第2回が6月25日、第3回が10月22日、第4回が11月26日の、いずれも土曜日に、米子市公会堂中ホールにて開催されました。

第2回は、機械工学科の森田慎一先生による「環境にやさしいエネルギー機器の基礎知識～キッチン編～」と題したセミナーが行われ、また第3回は、電子制御工学科の吉田進先生による「太陽光発電の現状と未来～太陽光発電の住宅への導入について～」のセミナーが行われました。第4回は、電気情報工学科の西尾公裕先生の「網膜・脳機能

に学んだ視覚センサ～自律移動型ロボット、移動体の衝突防止システム、人口眼などへの応用～」と題したセミナーが行われ、いずれも多くの方が来場されました。

文化セミナーを通じて、米子高専が地域へと貢献することができると思っています。来年度もぜひ御来場ください！

(米子高専文化セミナーは、その内容をビデオに撮影して、DVDで保存しております。貸し出しも行ってますので、御活用ください。)